

クレオールと海賊

—— ジョージ・ワシントン・ケイブルの 『デルフィーヌ夫人』における逸脱と共存の可能性*

藤 野 功 一

はじめに

ピーター・T・リーソンは2009年に出版した『海賊の経済学』(*The Invisible Hook: The Hidden Economics of Pirates*)で、17世紀から18世紀に活躍した海賊たちは自分たちの船長を「民主的に選出し、自分たちに関わる各種の重要な事柄を投票で決めた」(pirates democratically elected their “leaders” and voted on all other important matters that affected their society’s members) (19) ことを強調した。リーソンは経済的な効率という観点からこのころの海賊における船上の統治形態を見直して、「海賊組織は自分の権力を賢明に行使する船長には従い、反対に船員を食物にする船長を罰した」(Pirate organization rewarded captains for being good stewards of the power they possessed and punished them for preying on their crews.) と述べ、その頃の海賊船は帝国主義国家の支配下で強権的な船長のもとに運営されていた商船などよりもはるかに「民主的に」(democratically) 運営がなされていたとする (43)。彼は海賊を残忍な無法者として捉える考え方を転換させて「一部の海賊は18世紀初期にはやばやと、その水上に浮かぶ社会において、黒人に対し、白人と同じ乗組員としての価値と“市民権”を与えていた」(some pirate crews granted black sailors the same perquisites and privileges of “citizenship” in their floating societies as white sailors in the early 1700s) と論じ、むしろ経済的な感覚に優れ、民主的で異なる人種との共存に寛容な海賊像を描き出した。さらにリーソンはマルクス・レディカーの著作の主張を引用しながら、その一部分を拡大解

積して、海賊が産業革命以前の「国家資本主義」(state capitalism)の権威主義的で収奪的な階級構造に反逆する社会革命家のように行動した部分を強調している(11)。リーソンの議論の展開はかなり強引であり、後の書評でも賛否両論を引き起こしたが、その影響も大きく、たとえば、ルドルフ・デュランとジャン＝フィリップ・ベルニュは2010年の著作『海賊と資本主義』で、リーソンの議論をさらに推し進めて、海賊を、むしろ現代の政治体制に先駆けて、グローバルな世界経済を牽引し、民主的な選挙を行ってリーダーを決め、分権体制を整え、乗組員を平等に扱った存在として評価した(Durand 76-77)。

もちろん、18世紀のカリブ海を中心に活躍した海賊のすべてが、経済的な効率に敏感で、民主的で平等の精神をもった存在であったとは考えにくいので、リーソンの極端な議論は、むしろ、バフチンが言うところの「社会的意義をもつ発言」(socially significant verbal performance)である、と考えたほうが良いだろう。バフチンは『小説の言葉』(“Discourse in the Novel”)のなかで、「社会的意義を持つあらゆる発言は、時には長い間、広範囲にわたって自分の言語の意味と表現の志向に引きこまれた言語諸要素に一定の意味のニュアンス、一定の価値評価のトーンを押し付けることによって、それらの諸要素を自己の志向に感染させる力を持っている。このようにして社会的意義を持つ発言は標語のように使える言葉、短いのり言葉や賛辞などを伝える言葉を作り出すのだ」(Every socially significant verbal performance has the ability—sometimes for a long period of time, and for a wide circle of persons—to infect with its own intention certain aspects of language that had been affected by its semantic and expressive impulse, imposing on them specific semantic nuances and specific axiological overtones; thus, it can create slogan-words, curse-words, praise-words and so forth.) (Bakhtin 290) と述べた。リーソンの議論も、アメリカにおいて「海賊」という言葉に与えられてきた「一定の意味のニュアンス、一定の価値評価のトーン」のなかにある肯定的な部分をあらためて浮き上がらせて、歴史的な存在としての海賊を評価しようとする社会的意義を持つ発言だった、ということができる。

ここでは、リーソンの主張をヒントに、19世紀アメリカ南部作家が描き出し

た海賊像を改めて見直してみたい。19世紀アメリカ南部文学では、しばしば海賊が肯定的に描かれるが、果たしてこれらの肯定的な海賊像はリーソンがいうような、経済観念に優れ、民主的で、異なる人種との共存に寛容な存在という価値評価のトーンを与えられていたのだろうか。ここでは、その検証のために適切な例の一つとして、ジョージ・ワシントン・ケイブル (George Washington Cable, 1844-1924) の中編小説『デルフィーヌ夫人』 (*Madame Delphine*, 1881) を取り上げる。ケイブルの『デルフィーヌ夫人』は、これまでほとんど研究対象としては注目されてこなかったケイブルの中編だが、誇り高いエリート白人一族の出身でありながら、無法者の海賊となった後、改心してニューオーリンズの信用ある銀行家となった男、ウルシン・ルメートルには、リーソンがその「社会的意義をもつ発言」によって与えようとしていた海賊への肯定的な評価の要素がほとんどすべて見出せるだろう。

『デルフィーヌ夫人』に登場する元海賊のルメートルは、ヴィヌヴィエイユと名乗って再び生まれ故郷に帰り、銀行家として成功する。そののち、自分を改心させて一般市民となるきっかけを与えてくれた美しい少女をニューオーリンズで捜し出す。そして、その少女が一見白人であるものの、黒人の血筋を引くデルフィーヌ夫人の娘であったことを知ることとなっても、それを意に介せず結婚する。元海賊として社会規範から逸脱する部分を持ち合わせながらも、優れた金銭感覚をもって銀行を運営する才覚を持ち、人々に平等に接し、異なる人種との共存に寛容な態度を示すルメートルは、一見すると正体の知れない不定形な存在でありながら、その行動において民主的な関係と人種間の共存を成し遂げる行動主体であり、このような人物に対する作者ケイブルの肯定的な評価が反映されているだろう。

この論では、第1章で19世紀のニューオーリンズにおいて、混血の自由市民、および海賊がどのような存在であったかを論じたのち、第2章で、この作品で描かれたクレオール社会と海賊、およびクレオールの混血女性とウルシン・ルメートルとの関係のなかで、共同体における社会規範を代表する人物でありながら、同時にその社会規範から逸脱し、また、白人エリート層の出身であると同時に、民主的な態度をもって異なる人種との共存を成し遂げる存在と

して、元海賊が描かれていることを検証する。また、第3章で、このように社会規範からの逸脱と共存を同時に成し遂げるケイブルの海賊像が、彼と交友関係にあったマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィン冒険』に描かれた海賊像にも影響を与えている可能性があることを論じたい。

1. ニューオーリンズのクレオールと海賊

ケイブルの『デルフィーヌ夫人』は、1803年にルイジアナがアメリカに買収されてから18年近くが経った1821年から22年のニューオーリンズが舞台になっている。主な登場人物は、いわゆる4分の1の黒人の血筋をもつ混血のクアドルーン (quadroon) と呼ばれるデルフィーヌ夫人と、彼女が裕福な白人と関係を持って産んだ白い肌をした美しい娘のオリーブ、そして白人の元海賊のルメートルである。

まずはデルフィーヌ夫人と彼女の娘オリーブの社会的立場を理解するために、この時期までのニューオーリンズにおける混血の自由市民の人々の状況を述べておこう。歴史をさかのぼると、17世紀にフランス領となったルイジアナには、多くのフランス語を話す移民が住んでいたが、その後フレンチ・インディアン戦争に敗れたフランスはスペインにルイジアナを移譲し、1700年代の半ばから1800年まで、ルイジアナはスペインに統治された。スペインは1800年にルイジアナをフランスに返却するが、フランスもルイジアナを維持しきれず、ルイジアナはまもなくアメリカに買収されることになる。デスデュネスはその著『我々が民と我々が歴史——五十人のクレオールの肖像』(*Our People and Our History: Fifty Creole Portraits*, 2001)において、1766年から次のフランス統治時代の3年間を含めた1803年をいわゆるスペイン領の時期と呼び、この時期に混血の自由市民は豊かな生活を謳歌したが、ただし、彼らは社会的階層としては白人と奴隷の間に位置する市民として存在しており、白人は混血の人々の美しさを賞賛したものの、同時に白人は、彼等の存在によって黒人奴隷の反乱が助長されたり、白人の若者のモラルが低下したりするとみていたと述べている (Desdunes xi)。

その後、1803年のルイジアナ買収 (Louisiana Purchase) 以降にアメリカの

統治が行われるようになると、人種の混交に寛容なクレオールの風土は否定され、ルイジアナの黒人と混血の自由市民は徐々に法的な制限を課せられた。ルイジアナでは1806年に奴隷が自由市民になることを制限する黒人法 (the Black Code) が施行され、さらに、1808年に成立した民法 (the Civil Code) で、自由市民と奴隷、あるいは自由白人市民と混血の自由市民 (free people of color) との結婚は法的に制限され、白人の父親からの遺産相続の際には、いわゆる混血の子供は「婚外子 (natural children)」と考えられて白人の縁者による相続が優先され、遺産相続の権利に関して不利な立場に置かれることになった。こうして、アメリカ統治下で1806年と1808年に成立した法律により、奴隷から一般市民になる可能性は制限され、混血の自由市民の権利も、特に結婚と遺産の相続の点で極めて不利な状況に置かれてゆく (Clark 87-88)。1812年にルイジアナがアメリカの州に昇格した時点で、ルイジアナの人口ほぼ8万人中、いわゆる混血の自由市民が8千人ほどおり、そのほとんどがニューオーリンズに暮らしていた (Desdunes xii)。だが、このころすでに、これらの人々が自分たちの黒人の血筋を不利なものとして意識し始めていたことは想像に難くない。

ケイブルはこのような歴史的背景のもと、19世紀初頭まで、経済的に繁栄し、豊かな生活を送っていたアフリカ系移民の血を引く混血の自由市民が、ルイジアナがアメリカに買収されたのち、徐々にその経済的繁栄から法的に疎外され、差別の対象として人々から「奴らはクアドルーンなのさ」 (“Dey’s quadroons.”) (*Madame Delphine* 5) と呼ばれ、昔の栄華をそこかしこに示す邸宅の中で、ひっそりと暮らすようになったという前提で小説『デルフィーヌ夫人』を書いている。

19世紀クレオール社会において、混血の自由市民が片隅に追いやられた状況は、ケイブルのクレオールの定義の中にも表れている。ケイブルはルイジアナにおけるクレオールの歴史と暮らしぶりを綴った『ルイジアナのクレオール』 (*The Creoles of Louisiana*, 1884) のなかで、「クレオール」をこう説明した。

クレオールとは何か？たとえルイジアナでも、この問いには様々な答えが返ってくるだろう。だが、ルイジアナでは、スペイン系アメリカ人よりも、

最初はフランス系アメリカ人を指して使われていた。それは社会的な身分も示していて、奴隷の身分の血が入っていないことを表現していた。さらに、クレオールという言葉は... フランス系やスペイン系の子孫ばかりでなく、黒人との“混血”の人々もクレオールと呼ぶようになった。だからといって、イタリア系やイギリス系、“アメリカ系”クレオールなどという人々は存在しない。... つまるところ、ルイジアナ州のクレオールの最も簡便な定義は、“フランス語をしゃべる人々で、もともとは支配階級の出身の血を引いている人々”ということになるだろう。

What is a Creole? Even in Louisiana the question would be variously answered. The title did not here first belong to the descendants of Spanish, but of French settlers. But such a meaning implied a certain excellence of origin, and so came early to include any native, of French or Spanish descent by either parent, whose non-alliance with the slave race entitled him to social rank. . . . Besides French and Spanish, there are even, for convenience of speech, “colored” Creoles; but there are no Italian, or Sicilian, nor any English, Scotch, Irish, or “Yankee” Creoles. . . . [T]here seems to be no more serviceable definition of the Creoles of Louisiana than this: that they are the French-speaking, native portion of the ruling class. (41-42)

つまり、ケイブルの定義する「クレオール」においても、その主流をなすのはアメリカのニューオーリンズを中心に住む白人フランス系移民で、彼らはもともとヨーロッパでの支配階級の出身であり、複雑な文化と人々の交流の歴史のなかでみずからの社会的地位を保ってきたことに誇りを持っていた存在として語られる。このようなクレオール社会では、フランス系クレオールの中でも黒人との混血である人々は、決して平等には扱われず、また、デルフィーヌ夫人のように、いわゆる混血のクアドルーンである女性が、見た目は白人としかみえない自分の娘については、そのような社会的な抑圧から逃れるため、世間に

は自分の血を引いていないと虚偽の発言を行い、できればクレオール社会の中で高い地位を保っている裕福な白人男性と結婚して欲しいと願うのも、自然な感情であっただろう。そしてそのような事情を万事承知しながら、母親の願いを叶える人物として『デルフィーヌ夫人』の中で登場するのが、白人エリートの家庭出身でありながら、海賊となったのち、再び市民として戻ってきて銀行家として成功するウルシン・ルメートル、またの名をヴィヌヴィエイユと呼ばれる元海賊の人物である。

この作品の中で、ルメートルは、まず、幼い頃に両親を亡くし、「厳格な植民地学校の軍人上がりの厳格な祖父」(a rugged old military grandpa of the colonial school) から、「自分の孫を純血のフランス系クレオールとして、非の打ち所のない社会的地位を持つ、獐猛で残忍な男に仕上げるための」(to make “his boy” as savage and ferocious a holder of unimpeachable social rank as it became a pure-blooded French Creole) 絶え間ない教育の努力を注がれて育ったことが語られる。軍人上がりの祖父は、ルメートルをいわば典型的な植民地支配にふさわしい白人として育てようとした。ルメートルはもともと「おとなしいというよりはむしろ穏やかな、冷静な判断力のある博愛に満ちた表情」(a look, not of docility so much as of gentle, *judicial* benevolence) をした少年で、そこには祖父が求めるような「たとえば王者の風格とか、あるいは向こう見ずの大胆さが足りなかった」(it had not enough of majesty in it, for instance, or of large dare-deviltry) が、しかしそれでも、祖父の教育の甲斐あって、若きルメートルは当時のニューオーリンズの有力者で、表向きは鍛冶屋を名乗りながら、裏では密輸業に手を染めていたラフィット兄弟と「心からの友情」(the hearty friendship) で結ばれ、「生まれつきの会計の才能」(a natural turn for accounts) を活かして「密輸業者」(smuggler) となる (15)。ラフィット兄弟は歴史上に実在したニューオーリンズ出身の有名な海賊だが、ルメートルはラフィット兄弟とほぼ同じ時期に違法な密輸業に手を染め、海賊となったことがしめされる。『デルフィーヌ夫人』の語り手が述べるように、ニューオーリンズの共同体が徐々にアメリカ政府の統治に組み込まれる中で、最初は共同体に利益をもたらしていた「密輸業」(smuggling) は、徐々に「その誇りを奪い去ら

れ、恥ずべき、有害で、軽蔑すべきもの」(to lose its respectability and to grow disreputable, hazardous, and debased) となってゆき、結局、アメリカ政府は彼らの首に「賞金」(a price) をかけ、彼らは「無法者の海賊たち」(outlawed pirates) となってしまふ。もちろん、その間には、史実が示すように、1814年から15年の間の米英戦争のほぼ最後の戦いとなるニューオーリンズの戦いで、ラフィット兄弟とその一味が、義勇軍としてアメリカに味方し、いったんはアメリカ軍に勝利をもたらした英雄として称えられもすることもあったのだが、結局、ニューオーリンズの英雄として称えられた後も無法な海賊行為を続けたラフィット兄弟はアメリカ政府から追われ続け、1820年ごろを境にして、ラフィット兄弟は海賊としての活動をやめて行方知らずになる。そして小説の中では、ちょうどこのころにルメートルも、たまたま襲った商船に乗っていたデルフィーヌ夫人の娘であるオリーブに改心を勧められ、この娘に恋心を抱いたルメートルが海賊を廃業してニューオーリンズの銀行家となったことが語られる。

『デルフィーヌ夫人』に登場する語り手が同情を込めて語るように、ニューオーリンズの白人のエリート一家に生まれたルメートルは、海賊となったものの、同時に財務の才能を駆使し、密輸を通じて人々に利益を与えていた存在でもあった。ケイブルの他の作品の中でも海賊は肯定的なトーンで描かれ、海賊と一般市民との経済的なつながりが存在していたことが示される。たとえば『ルイジアナのクレオール』では、貿易禁止が行われた中でもラフィット兄弟が大胆に密輸品や奴隷の輸入を行い、そのような違法行為を行っても地域の有力者との間の交流が断たれることがなかったという歴史的事実が記述される(166-67)。また、ケイブルの代表作『グランディシム一族』(*The Grandissimes*, 1880)では、1803年頃のニューオーリンズの一般市民の商人が海賊の密輸品との取引によって栄えていることを暗示する描写がさし挟まれる(312)。いずれにせよ、ケイブルの作品においては、19世紀初頭のころまで、密輸によって地域の経済に繁栄をもたらしていた海賊が、その後アメリカ政府の規制によって徐々にニューオーリンズの一般社会から締め出されてゆく記述が、過去へのノスタルジックな追憶とともに繰り返される。こうしてみると、ケイブルは1820年代初

頭のニューオーリンズを舞台に、アメリカの統治のもと、旧来の生活様式から遠く隔たった暮らしをせざるをえなくなったものたちが出会う構図——かつては社会の表舞台で誇り高い市民として振舞っていたが、アメリカ政府の圧力によって徐々に活動の場を狭められ、海賊から足を洗って銀行家となったルメートルと、その一方で、アメリカの統治下において制定された法のもと、自分の黒人の血筋をいやが応にも意識せざるをえなくなり、社会の片隅に追いやられていくデルフィーヌ夫人とその娘が出会うという構図——をもとに、中編小説『デルフィーヌ夫人』を構想したと言えるだろう。そのような社会的構図のもと、元海賊のルメートルは、町の人々にはその正体が不明瞭な人物として振る舞う。その正体が不明瞭な性質は作者ケイブルの求める人物像の要件を理想的に満たすものであり、さらにはこの元海賊がクレオールの娘との結婚にふさわしい相手と考えられる重要な条件として描かれている。そして正体不明の元海賊の示す社会からの逸脱と共存が、まさにケイブルがこの小説で求めるものだった。

2. 元海賊による共同体からの逸脱と共存

『デルフィーヌ夫人』において、混血のクレオールと海賊との関係はどのように描かれているのかをここで改めてまとめておこう。この中編小説の語り手によれば、海賊ルメートルが、海賊業から足を洗い、生まれ故郷の地元ニューオーリンズで銀行家となり、成功したのは、1821年頃のことである。彼は昼間は堅実な銀行家として振る舞いながら、夜になるとニューオーリンズの夜を彷徨い、自分を改心させて一般市民となるきっかけを与えてくれた美しい少女を捜していた。そして彼はとうとう、そこかしこに自由と贅沢な暮らしを謳歌していた頃の面影を残す屋敷に、自分が目当てとしている少女が、その母親とひっそりと暮らしているのを見つける。少女は一見白人ではあったが、黒人の血筋を引くデルフィーヌ夫人の娘であった。かつて裕福な白人の妻であり、今は亡き彼から財産を分与されてはいたものの、徐々に生活が苦しくなっているデルフィーヌ夫人は、自分の娘が白人の女性として、白人の男性と結婚してほしいと願っている。そして、じつは娘のオリーブも、自分が改心させた白人の海賊

の男に密かに思いを寄せていたことが明らかになる。デルフィーヌ夫人とその娘の願いを知ったルメートルは、デルフィーヌ夫人の娘が混血であってもかまわず、白人である自分と結婚できるよう取りはからう。するとデルフィーヌ夫人は、自分の娘が混血であることが知られて、ルメートルの名誉に傷がつかないようにと考え、自分はこの娘の実母ではなく、白人の両親から育ててくれるよう託されたただけだと宣誓して、自分の娘を自分の家系から切り離し、ルメートルとオリーブは、ともに白人の自由市民として生活し始めることが暗示されて、この小説は終わる。

この『デルフィーヌ夫人』で、ルメートルが夫人とその娘の救い手となるにあたって強調されるのが、ルメートルの優れた経済観念と民主的な態度、そして人種との共存に寛容な要素である。

まず、この小説の語り手がルメートルの来歴を語るにあたって、印象深く描きだす、経済観念に優れた海賊像がどのようなものかを見ておこう。この小説の語り手は、ラフィット兄弟とともに密輸業者として活躍していた頃のスペイン統治時代のルメートルが人々に信頼され、「まさに財務を預かるにふさわしい男」(the very exchequer of truth) (16) であったことを記述している。さらに、ニューオーリンズの司祭であり、ルメートルの幼馴染でもあるジェローム神父は、人々への説教の中で、海賊がその密輸を通じてニューオーリンズの一般市民へ豪華な商品を供給しており、海賊のしている密輸が罪だというなら、その密輸によってもたらされた服を着て教会へ集まっている人々もまたその罪を共有していることを示唆して、「紳士淑女の諸君、密輸された服を着て、ここに座っている方々よ、どうぞ私とともに胸を打ち、『私も罪人です。神よ。私もどうぞお許してください』と叫んで下さい」(God help you, monsieur, and you, madame, sitting here in your *smuggled clothes*, to beat upon the breast with me and cry, 'I, too, Lord, I, too, stood by and consented.') (37) と訴えかける。こうして、18世紀初頭、メキシコ湾に面し、ミシシッピ川の河口に位置する港湾都市であったニューオーリンズの市民たちの生活は、海賊行為、あるいは密輸といった違法行為と共犯関係にあり、ニューオーリンズの経済的な繁栄は、海賊による密輸行為によって支えられていたことが示唆される。さらにこの小

説の語り手は、ルメートルが、その財務の才覚を生かして人々の信用を得ており、さらには密輸などを通じて街の一般市民にも富をもたらしていたことを示して、彼が海賊から足を洗ったのちも、ルメートルが市民にもどって、経済感覚に優れた銀行家として成功することに必然性をもたせている。

また、この小説の中盤では、ニューオーリンズの白人の市民よりもより民主的で、博愛に満ちた態度で混血のクアドルーンに接するルメートルの姿が強調される。そもそもルメートルが海賊から足を洗うきっかけとなったのは、彼が海賊の長であった時に、たまたま襲った船にいたデルフィーヌ夫人の娘のオリーブが、彼にキリスト教の祈祷書を渡し、悔い改めることを勧めたためである。若く美しいオリーブにルメートルは心を動かされ、改心して一般市民に戻るのだが、すでに述べたように、ルメートルは少年のころは「おとなしいというよりはむしろ穏やかな、冷静な判断力のある博愛に満ちた表情」をした少年であった。オリーブと出会ったことで、彼はもともと持っていたキリスト教的な博愛の精神を取り戻し、一般市民に戻って銀行家になったと考えることができる。この博愛の精神のために、幼馴染の司祭に言わせれば、ルメートルは、混血のデルフィーヌ夫人も安心して信頼することができるような「神に愛された銀行家」(God's own banker) (50) である。また、トゥールーズ通りに新しい銀行をだした元海賊の彼の顔も、デルフィーヌ夫人が最初に見たときには「彼女の見た彼の顔は屈強で、重々しく、人間らしい優しさとその褐色の顔のいちいちの特徴からおだやかに溢れ出るようであった」(she saw his face, its strong, grave, human kindness shining softly on each and every bronzed feature) (52) と描写される。さらにルメートルの博愛の精神は、白人の夫と死に別れ、年頃の娘を抱えて寄る辺のない身となったデルフィーヌ夫人に対して親切に接し、彼女がつかまされた偽札を正式な紙幣に両替してやる行為に、端的に表現されているだろう。

そしてルメートルをよく知る司祭のジェローム神父は、経済力があり、人間らしい優しさをもつルメートルが、混血であるがゆえに社会の周辺に追いやられているデルフィーヌ夫人の頼るべき人物としてふさわしいことを見抜き、ルメートルを娘の「後見人」(guardian) にするようデルフィーヌ夫人に勧める

(55)。そして司祭の助言に従ったデルフィーヌ夫人が、ルメートルに娘の後見人になってほしいと頼むと、ルメートルはこの願いを聞き入れ、さらにデルフィーヌ夫人の娘が母親から黒人の血筋を引き継いでいることを承知で、結婚することになる。

このように、一方で共同体と密接な経済的関係を持ちながら、もう一方ではその共同体の黒人法や民法が示唆する白人優越主義的な規範から逸脱して、世間の目を欺きつつ混血のクレオールを受け入れる元海賊という人物像は、一見するとひとつのアイデンティティに固定されることのない、正体の定かでない怪しげな存在と思われるが、しかしそれはケイブルが作家としてのみずからの矛盾する立場を解決する切実な必要性から描かれたものであった。そもそもケイブルがこの中編『デルフィーヌ夫人』を書こうと思ったきっかけは、『デルフィーヌ夫人』の雑誌掲載から遡ること7年前の1874年に描いた短編“ちいちゃなポーレット” (“Tite Poulette,” 1883)の結末について、匿名の読者から抗議をされたためである。“ちいちゃなポーレット”では、混血の女性のジョン夫人が育てていた美しい娘ポーレットにオランダ系白人の青年が恋をするが、その娘が黒人の血筋を引き継いでいることを恐れて青年は苦悩する。しかし、最後にジョン夫人が、自分の育ててきた娘は本当の娘ではなく、スペイン系の白人の男性が黄熱病にかかって死んだのをジョン夫人が看取った時に、彼から引き取った白人の娘だと告白し、青年と娘は混血の問題に悩むことなく結婚するという大団円を迎えるという話であった。このロマンスにおいて、ケイブルはニューオーリンズのクレオール社会に存在する混血の自由市民の問題を取り上げながらも、混血の問題を単に主人公の誤解と思い込みによって生じたものとすることによって、男性の白人主人公が直面する問題として混血女性との結婚の可能性を描くことをうまく回避しようとした。

しかしその後、この作品に対してケイブルは「わたしたち哀れなクアドルーン」(us poor quadroon)と名乗る匿名の読者から抗議の手紙を受け取る。そこには、“ちいちゃなポーレット”で描かれている結末は真実ではない、ジョン夫人は自分の娘が白人の男性と堂々と結婚するために、「たくさんのたくさんの現実に存在するクアドルーンの母親と同じように」(like many and many a real

quadroon mother)、ポーレットは実の娘ではない、と嘘をついたのだ、という意見がしたためられていた (“Preface,”vii)。この手紙によって、ケイブルは、自分の小説がニューオーリンズの抱えている社会問題を正面から描いていない、つまり、歴史的事実からも歴然としている、クレオール社会における白人と黒人の混血の歴史を、白人の主人公のぶつかる現実として描いていない、と指摘されたと言ってもよいだろう。

この切々たる抗議を受けて、ケイブルは再び、クレオール社会における白人と黒人の混血の歴史を物語ることを決意する。しかしそれは同時に、ケイブル自身が持っているちぐはぐな二つの感情、すなわち、白人と黒人との混血を否定したいという保守的な心情と、その一方で、アメリカ社会の中で不利な立場に立たされている黒人や混血の市民に対する同情とあいだに生じる矛盾に何らかの形で解決を与えなければならなかった。ペインがその論文「自由を語る新南部の物語——ジョージ・ワシントン・ケイブルの“ちいぢゃなポーレット”と『デルフィーヌ夫人』を読む」(“New South Narratives of Freedom: Rereading George Washington Cable’s “Tite Poulette” and *Madame Delphine*,” 2016) で論じているように、ケイブル自身は、のちにはっきりと人種間の結婚に反対する意見を表明するようになる。たとえばケイブルは、その論説「沈黙の南部」(“The Silent South,” 1885) で、みずからの保守的な心情を臆面もなく吐露して、混血に否定的な態度をはっきりととっている。ケイブルはもちろんクレオール社会における奴隷や、あるいは混血の自由市民の置かれた状況に同情していたが、同時に、ニューオーリンズに生きるエリート白人として、個人的には白人と黒人の混血が進むことを肯定できなかつた。

もしもケイブルが、「わたしたち哀れなクアドルーン」と名乗る読者の要請に応じて、新たな物語を作ろうとするなら、ケイブル自身の属する白人共同体の保守的な価値観を守りながら、さらに白人男性と黒人の血筋をもつ女性との結婚を肯定的に描き出すために、社会的規範から逸脱していながら、しかも共同体の内側におり、多様な社会構成員との共存をその身に受け入れる白人の存在が必要であった。ケイブルはこの難問を解決するために、『デルフィーヌ夫人』で元海賊のルメートルを登場させ、この正体の怪しげな登場人物に託して、人

種間の結婚という社会的規範からの逸脱と、そして共存の可能性を示すことができたとも言えるだろう。

この小説の中で司祭のジェローム神父は作者の代弁者という役割を与えられているが、彼もまたデルフィーヌ夫人と彼女の娘に対して「深い憐れみの心を掻き立てられて」(with a stir of deep pity) はいるものの、白人のクレオール社会で人々から信頼されている司祭は、彼女たちを救うために具体的な行動を起こすことはできない。司祭は、ルメートルをデルフィーヌ夫人の娘の後見人に推薦することによって、この厄介な問題の解決を自分の幼馴染の元海賊に託す。そして、デルフィーヌ夫人の境遇に理解を示し、その娘の後見人となって経済的にも支援を行おうとし、オリーブを引き取って結婚するという選択をするのは、白人ではあっても、その内面において社会の規範から常に逸脱し続ける元海賊のルメートルなのである。

ルメートルは完全に市民として一般社会に溶け込んでいるわけではない。彼は自分ではまったく心を改めて、銀行家ヴィヌヴィエイユという新しい名を名乗ってニューオーリンズで生活しているのだと考えているが、しかし、彼が通常の市民生活に決して馴染めていないことは、彼が不眠症となって、夜の町を歩き回るといふ奇癖を示すことによって示される。彼は銀行家として成功した後も、その地位に安らげずに眠れなくなってしまい、ほとんど毎晩「誰にも邪魔されず、夜の空を見上げながら、ゆっくりと散歩」(slow, unmolested, sky-gazing walk) をするようになる。また、彼は銀行家としても、どこか常軌を逸した存在であり、彼は「たしかに、昼の間、彼の静かな『銀行』の役職の席についていた。しかしそこでも、日に日に、彼のしていることは、銀行家の仕事が多岐なものかを知っているものにとってはひどくびっくりするようなことをしでかすようになっていた。すくなくとも、銀行家として、ヴィヌヴィエイユ氏はすっかりそのバランスを崩してしまった」(By day, it is true, Monsieur Vignevielle [Lemaitre] was at his post in his quiet "bank." Yet here, day by day, he was the source of more and more vivid astonishment to those who held preconceived notions of a banker's calling. As a banker, at least, he was certainly out of balance) (77-78) と描写される。これらの描写はもちろん、ル

メートルが、自分を改心させてくれた娘への恋心から、バランスを崩した生活をしているのだということを示してもいるだろうが、同時に、彼がどれほど過去から決別したと思おうとしても、結局彼は内面的には常に市民生活から逸脱した人物であることを暗示しているだろう。

ルメートルが一般の規範から逸脱するのは、彼が自分なりの考えと倫理に基づいて行動しているためである。ケイブルはルメートルが過去に「密輸業」(smuggling)を行っていたとは言っても、それは彼の「高尚な美德のひとつ」(one of the sublimer virtues)のあらわれであったと描写し、彼の密輸業からさらには海賊に至る、市民生活からの逸脱は、彼が悪党となってしまったからではなく、むしろ世情が移り変わったことによる結果であると説明する。こうして、ルメートルは、常に自分なりの倫理を持って行動し、世間の常識や法というものが簡単に変更されるものであることを意識している人物であり、世間の規範に従って考えるよりは、むしろ海賊のラフィット兄弟のような「自分たちで考える人たち」(thinkers)に属していることが強調される。

この小説で、魅力的な説教を行い、人々をひきつける司祭のジェローム神父は「自分がどんな風に言うべきか、ではなく、自分がどんな風に感じるべきかをより考える」(he took more thought as to how he should feel, than as to what he should say)人物として描写されているが、この司祭によって評価される元海賊のルメートルも、司祭と同じく、自分なりの倫理的な感覚に従って物事を判断する人物として描かれる。そのようなルメートルを司祭は信頼し、司祭はデルフィーヌ夫人に向かって、「デルフィーヌ夫人、あなたのような立場ですと、この国の白人の男たちは全員、陸にしようが海の上にしようが、すべて海賊のようなものでしょうし、そんな海賊の中では、あなたの言っている男は、間違いなくもっとも良い海賊だと思いますよ。」(“To you, Madame Delphine, as you are placed, every white man in this country, on land or on water, is a pirate, and of all pirates, I think that one is, without doubt, the best.”) (17) と述べ、社会の規範に左右されず、自分なりの倫理を持って行動するルメートルを、混血の彼女にとってもっとも信頼すべき人間として示す。小説の結末では元海賊のルメートルは、「どこもかしこも立派で裕福な男性で、

どこからみても力強さと心の優しさを内に込めたような花婿」(the bridegroom, rich in all the excellences of man, strength and kindness slumbering interlocked in every part and feature) (128) という、オリブの夫にふさわしい人物として描き出される。こうして、人種について保守的な考えを持ちながらも、混血の自由市民の窮状に同情を抱く作者ケイブルは、強靱な倫理をうちに秘めつつ、共同体からの逸脱と共存を同時に成し遂げる元海賊のルメートルを、いわば社会の多様な価値観の要請に応える「不定形な行動主体」(amorphous agency) として登場させ、ニューオーリンズにおける人種を含めた人間関係の複雑なあり方を肯定的に描くことができたと言えるだろう。¹

3. ケイブルからトウェインへ

社会の規範からは外れながらも、経済について優れた感覚を持ち、自らの内面的な倫理に従って行動する元海賊のルメートルは、デルフィーヌ夫人と彼女の娘の苦境を救うに当たって、その肯定的な部分が都合よく誇張された登場人物かもしれない。しかし、このケイブルの作品における海賊像を再評価することによって、19世紀アメリカ南部文学で描かれる理想的な海賊像とそれに魅了される一般市民との関係をより具体的にみなおすことができる。例えば直接関係する例として、トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*, 1884) を見てみよう。トウェインの小説の20章では、詐欺師の「王様」(the king) が、19世紀にしばしば行われた、宣教のために人々が集う野外集会で詐欺を働き、自分が改心した元海賊であると告白して、その集会の人々から寄付金を募り、「今までの宣教集会方面で稼いだ一日の上りとしては最高の金額を稼ぎ出した」(it laid over any day he'd ever put in in the missionarying line) という場面がある。

ヴィクトール・A・ドイノの『ハック・フィン執筆——マーク・トウェインの創作過程』(*Writing Huck Finn: Mark Twain's Creative Process*, 1991) によれば、トウェインがこの20章の場面を描いたのはおそらく1882年である(23)。また、アーリーン・ターナーが『マーク・トウェインとワシントン・W・ケイブル——文学的友情の記録』(*Mark Twain and George W. Cable: The*

Record of a Literary Friendship, 1960) 述べているように、トウェインは、すでにこのころ同じ南部文学者としてケイブルと深い親交を結んでいた(3)。そのため、1881年『スクリブナーズ・マンズリー』に掲載されたケイブルの『デルフィーヌ夫人』をトウェインが読み、その後、ケイブルの描き出した元海賊の人物像を意識しながら、『ハック・フィン』で詐欺師の王様が、自分は改心した元海賊である、と告白して詐欺を働く部分を書いていた可能性は大いにあるだろう。たとえそうでないにせよ、『デルフィーヌ夫人』に描かれた元海賊を知っている読者は、のちに『ハックルベリー・フィンの冒険』を読む際に、なぜこうもたやすく、野外集會に集まった人々が、元海賊だという男に多額の金を寄付しようとしたのか、その理由が容易に理解できたはずである。もしも19世紀前半の人々の心に共有された海賊像が、一方で共同体の規範から逸脱してはいるものの、もう一方ではその経済的な才覚と密輸業によって地元の有力者とのつながりを保つ存在であり、博愛の精神を持って人々に平等に接し、その内面に強い倫理観を持つ信用するに足る人物であるとすれば、そのような元海賊の男に寄付をする野外集會の人々は、ただ単に宗教熱に浮かされた愚かな民衆ではない。むしろそこには、元海賊に対して、厳格な社会的規範には違反するかもしれないが、より民主的で、より寛容な個人の倫理観にもとづく人間関係の可能性を見出し、さらには元海賊がもっている経済的なネットワークに投資することによって、将来的には自分たちの共同体にも利益をもたらされるのではないかという、未来への期待としたたかな計算のもとに行動する民衆の姿が見えてくる。その期待と胸算用があればこそ、「王様」が単に改心した「元海賊」という言葉を口にしただけで、それまでにない寄付金をだまし取ることができた、と考えることもできるだろう。

トウェインの作品に登場した王様が利用したのは、19世紀に広く流布した、人々を魅了する肯定的な海賊像だが、この部分を『デルフィーヌ夫人』に描かれた海賊像を視野に入れながら読むことによって、少なくともこの時代の南部を代表する二人の小説家において、海賊像にどのような社会的意味づけが海賊に対してなされているのかがあきらかになるだろう。この場合であれば、少なくともケイブルとトウェインという二人の文学者の間では、経済観念に優れ、

自らの内なる倫理に従い、共同体の内部にしながら、その社会的規範からの逸脱 (transgression) と異質な存在同士の共存 (concomitance) を同時になしとげる存在という意味づけが海賊という言葉に対して強く付与されていると考えることが可能である。

結論

リーソンの著作が示唆した、経済に鋭い感覚をもち、民主的で、様々な人種を平等に扱った海賊像は、多様な実態を持つ海賊の現実を考えれば、やや極端な主張である。しかし、彼の議論を、海賊という言葉に人々が肯定的なトーンとニュアンスを与えてきた歴史を掘り起こしたものとして評価すると、彼の議論は 19 世紀のアメリカ南部文学に典型的に見られる海賊像を分析するにあたって、大変効果的な視点を提供していると言えるだろう。実際にケイブルは『デルフィーヌ夫人』において、経済感覚に優れ、内なる倫理に従って民主的な態度でデルフィーヌ夫人に接し、そして寛容な精神をもって混血のオリーブを妻に受け入れる元海賊のルメートルを描き出した。また、そのような海賊像をトウェインも共有し、元海賊に人々が惹かれる姿を、『ハックルベリー・フィンの冒険』で描き出したと読むこともできる。19 世紀の、少なくともケイブルやトウェインに共有されていた海賊像に与えられた社会的意義を言い当てているという点で、リーソンの著作も評価すべきではないだろうか。

* 本稿は、日本英文学会第 89 回大会 (2017 年 5 月 20 日、於静岡大学) での口頭発表に加筆修正を加えたものである。

¹ Peter Adams がその記事で伝えているように、現代社会においても、たとえば大手食品会社のマーケティング責任者は、2019 年の時点で、現在の多様な社会的要請に応えるための才能に必要なのは、消費者の要請に機敏に対応する才能だとして、「将来における行動主体は、厳格に一つの役割に固定されない。それは不定形な存在である」(“The agency of the future will be one that we can't pin down structurally. It's amorphous.”) と述べている。このような「不定形な行動主体」(amorphous agency) への肯定的な評価は、すでにケイブルの文学作品の海賊像において先駆的に描き出されているとも言えるだろう。

Works Cited

- Bakhtin, M. M. "Discourse in the Novel." *The Dialogic Imagination*. Ed. Michael Holquist. Trans. Caryl Emerson and Michael Holquist. Austin: U of Texas P, 2011. 259-422. (バフチン、ミハイル『小説の言葉』伊藤一郎訳 東京：平凡社、1996年)
- Cable, George W. *The Creoles of Louisiana*. New York: Scribner's, 1884.
- . *The Granddissimes: A Story of Creole Life*. New York: Scribner's, 1880.
- . *Madame Delphine*. 1881. New York: Scribner's, 1896.
- . "Madame Delphine." *Scribner's Monthly* 22. 1-3(1881): 22-31, 191-99, 436-43.
- . Preface. *Madame Delphine*. By Cable. v-viii.
- . "The Silent South." *The Silent South: Together with The Freedman's Case in Equality and The Convict Lease System*. 1885 New York: Scribner's, 1899. 40-112.
- . "'Tite Poulette.'" *Old Creole Days*. New York: Scribner's, 1883. 213-43.
- Clark, Emily. *The Strange History of the American Quadroon: Free Women of Color in the Revolutionary Atlantic World*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2013.
- Desdunes, Rodolphe Lucien. *Our People and Our History: Fifty Creole Portraits*. Trans. Sister Dorothea Olga McCants and Daughter of the Cross. Baton Rouge: Louisiana State UP, 2001.
- Doyno, Victor A. *Writing Huck Finn: Mark Twain's Creative Process*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1991.
- Durand, Rodolphe, and Jean-Philippe Vergne. *The Pirate Organization: Lessons from the Fringes of Capitalism*. Boston: Harvard Business School, 2012.
- Leeson, Peter T. *The Invisible Hook: The Hidden Economics of Pirates*. Princeton: Princeton UP, 2009. (リーソン、ピーター・T『海賊の経済学』山形浩生訳 東京：NTT出版、2011年)
- Payne, James Robert. "New South Narratives of Freedom: Rereading George Washington Cable's 'Tite Poulette' and *Madame Delphine*." *MELUS* 27.1 (2002): 3-23. *Humanities International Complete*. Web. 15 Oct. 2016.
- Peter, Adams. "General Mills CMO predicts 'amorphous' agencies in the future." *MarketingDive*. 3 Nov 2020. < <https://www.marketingdive.com/news/general-mills-cmo-predicts-amorphous-agencies-in-the-future/563884/> >
- Turner, Arlin. *Mark Twain and George W. Cable: A Record of a Literary Friendship*. East Lansing, MI: Michigan State UP, 1960.
- Twain, Mark. *Adventures of Huckleberry Finn*. 1885. New York: Norton, 1999.